

# 井筒俊彦「東洋哲學」をめぐる（前篇）

末 木 恭 彦

## 一、序

最終講義を始める前に、私の最終講義のために後押しをして下さった矢野主任以下の文化學部門の先生方、取り分けこの場の設定に盡力下さった河谷先生、滝沢先生には厚くお禮を申し上げます。

この最終講義に当たって井筒俊彦の東洋哲學に就いて話をしようと思います。

この十年間私の一番力を注いで研究していたのが井筒俊彦の東洋哲學です。然しまだ全く井筒について研究の發表をしていません。そこで井筒について現段階での私の研究を纏めておこう、そう考えてこの主題を選びました。

今日は井筒俊彦が「東洋哲學」を如何なる物として考えているか、その理念を追求し、具體的に東洋哲學をどのように扱っているのか、その一端を検討してみたいと思います。

## 二、井筒俊彦とは誰か？

井筒俊彦と言っても、この名を知らない人も少なくはないでしょう。

現代日本哲學研究者、宗教哲學研究者（取り分けイスラームに關心を抱く者）なら知らぬ者は居ないでしょう。然しそれ以外となると知名度は高くはないであろうと思います。

先ず井筒俊彦とは如何なる人物か簡単に紹介する事から話を始めます。

井筒俊彦 一九一四（大正三）年五月東京四谷に生まれる

一九九三（平成五）年一月没。享年七十七

子供の頃から父親から禪を基本とした獨特の教育を受けています。父親は會社員であつたようです。此處で忘れてはならないのは、彼が生まれた當時ヤマト人の壓倒的多数は農民であり、都市に住む會社員は少数の選ばれた人であつたと言う事です。それ故高い教養を持ち、其れに基づいた獨自教育を自分の子供に施していたのです。禪籍の素讀、禪から派生させた靜坐法を行つていたと言います。佛教系と言つて好い教えを授かつていたのです。然し中等教育は青山學院で受けています。青山學院、アメリカメソジスト教會宣教師によつて開かれた學校です。當時の青山學院では禮拜が義務だつたようです。最初井筒は拒否反應を起こしたようです。然し後には信仰とは距離を取りつつ、基督教に興味を示しています。

井筒は語學の天才として知られています。英語を始め、ギリシア語、ラテン語、サンスクリット語、ヘブ

ライ語、アラビア語、ペルシア語、ロシア語など二十ヶ國語以上に通じていたと言われます。その語學の才能の片鱗を見せたのがこの青山學院時代です。英語には最初馴染めなく落ち零れ掛けていた、ところが複數を教わった時英語を母語とする人とヤマト人の違いに氣附いた。例えばヤマト人は人が一人いるか二人いるかそんな事は氣に掛けない。ところが英語母語者は瞬間にして一人と二人以上の違いを把えて表現する。其處から英語が面白くなつたと、後に回想しています。此處にはコトバの働きについて關心の芽生えが認められます。

中等教育は青山學院で受けましたが、高等教育は慶應大學で受ける事になります。會社員であつた父の希望もあつて經濟學部の豫科に進みます。然し經濟學には全く興味を持たなかつた、一緒に經濟學部豫科に入った人の中に同じ様に經濟學に興味をもてずにいる人がおり、彼と井筒は親しく交わる事になります。その友とは池田彌三郎です。二人して哲學に關心を懷き、西田幾多郎に羨望の眼差しを送り、カントなどの哲學書を競つて読んでいた、此れも後の回想です。そして二人とも經濟學部から文學部に轉部します。池田は國文に進み、慶應の折口信夫の後繼者に育っていきます。井筒は英文に進み、西脇順三郎に師事します。西脇に高く評價されたと思われ、文學部卒業後直ちに助手に採用されています。

なお豫科時代に東京外國語學校夜間部に通いロシア語を習得しています。また助手時代からヘブライ語、アラビア語、ギリシア語などの學習を始めています。此處で注目出来る事はヘブライ語が聖書原典研究會において學ばれ、アラビア語は日本に亡命してきたイスラームの大學者ムーサー・ギビエフなどに教えを受けていることです。即ち單に言葉として學ぶのではなく、その言葉による思想・哲學の精髓と一緒に學んでいることです。

一九四一（昭和十六）年處女出版である『アラビア思想史』を刊行しています。しかし井筒の研究はイスラーム思想・哲學へ一直線に進んでいった訣ではありません。戦争を挟んで一九四九（昭和二四）年に初めて大學で教えます。その擔當科目は「言語學概論」です。實は此の科目は師の西脇順三郎が長く教えていました。即ち井筒は師西脇の後繼者になったと言えます。ただし英文學の後繼と言うことではありません。此の講義を始めた同じ年『神秘哲學ーギリシアの部』を刊行、通信教育部のために『露西亞文學Ⅰ』『露西亞文學Ⅱ』も書いています。（これが後の『ロシア的人間』の基礎となる。）

井筒の名は日本國內では言語學或いは言語哲學の研究者として高まっていたのではないかと思われれます。その證據に京都大學が言語學の教授として招こうとしています。慶應では言語文化研究所を開設し必死の引き留めを行います。當の井筒は海外へ活躍の場を求めます。

イスラーム研究が盛んなカナダのマギル大學に招かれます。尤もカナダに於いて研究をしていた訣ではなく、マギル大學がイスラーム研究所テヘラン支部を開設するとテヘランへ移住します。またマギル大學に移った時期からエラノス會議に参加しています。テヘランではマギル大學からイラン王立哲學研究所教授に移っています。尤もこの時期もテヘランに居續けた訣ではなく、エラノス會議などヨーロッパに屢々赴いており、鎌倉の住居にも年何ヶ月かは過ごす生活をしていたようです。このテヘラン時代イスラーム哲學の研究を中心にしています。然しイスラーム哲學研究に閉じ籠もってはいません。現代哲學研究にもしつかり目配りしています。またエラノス會議では専ら中國思想を中心にして話をしています。

然しテヘラン生活は一九七九（昭和五四）年二月に絶たれます。イラン・イスラム革命が起こり、國王は國外へ退去、日本政府が派遣した最後の救援機でテヘランを後にして、アテネを経由して日本へ歸國しま

す。この歸還の途中イスラム研究は一段落附けて、今後は「東洋哲學」研究に捧げようと決心したと言われています。實際革命が一段落した後テヘラン大學に招く話が出て居たのですが、井筒は其れを斷り續けて居たようです。そして一九八〇年彼の「東洋哲學」を本格的に追求する論文「意識と本質」の連載を雑誌『思想』に始めます。「意識と本質」に關聯する短い論文三本を併せ一九八三（昭和五八）年一月『意識と本質』の名で刊行します。この書は彼の主著と言われています。東洋哲學の追求は彼の絶筆となる『意識の形而上學―「大乘起信論」の哲學』（一九九二（平成四）年『中央公論』に連載、一九九三年三月單行本刊行）に至るまで「東洋哲學」が追求されます。

以上が井筒俊彦の簡単な履歷です。

### 三、「意識と本質」と「東洋哲學」

履歷を話す中で『意識と本質』が「東洋哲學」を本格的に追求すると述べました。此の點を先ず明らかにしておきたいと思ひます。

その前に『意識と本質』という書物を簡単に説明しておきます。既に述べた様にこの書は雑誌『思想』に連載した同名論文を中心として、關聯する短い論文三本を併せて成り立っています。論文は一九八〇（昭和五五）年六月號から掲載し、最終回を迎えたのは一九八二（昭和五七）年二月號、その間八回に亘って連載しています。そして一九八三（昭和五八）年一月單行本として岩波書店から刊行されます。この單行本は現在絶版となり、この單行本を底本とした岩波文庫版（一九九一年初版）が流通しています。外に『井筒俊

彦著作集・第六卷』（中央公論社、一九九二（平成四）年十月）版、『井筒俊彦全集』版があります。但し『全集』は原論文の発行順に編輯し直しているので、『意識と本質』に収録される論文が纏めて載っています。此れ等の本によって文に異同があるかはまだ確かめていません。

今は岩波文庫版を使用して話をしていきます。単行本版、全集も所有しているのですが、研究室に備えておきました。研究室を明け渡すに当たり、箱詰めした儘出すことが出来ません。そこで岩波文庫版に據ります。

「意識と本質」は「東洋哲學」を本格的追求した最初の論文と申しました。此れは勿論理由があることです。一つは彼の歸國に当たったの決意があります。然し彼の年譜を見ると、歸國した一九七九（昭和五四）年に刊行されたのは『イスラーム生誕』（人文書院、翌年五月『イスラーム哲學の原像』（岩波新書）です。「意識と本質」連載中一九八一（昭和五六）年十二月には『イスラーム文化』（岩波新書）が刊行されています。『意識と本質』に収録される「本質直観」は一九七九年十二月雑誌『理想』に最初発表されています。この『理想』は『イスラーム哲學特集號』です。『意識と本質』では「イスラーム哲學斷章」と副題が付いています。即ち歸國當初彼の意思にも拘わらず、イスラーム哲學専門家として仕事をしていることが分かります。

ところで文庫所収「意識と本質」は副題が「東洋哲學の共時的構造化のために」となっています。（全集収録本も著作集所収本もこの副題は付いています。）序でに言っておけば『意識と本質』という書物には「精神的東洋を求めて」と副題が付いています。（『著作集』では副題が「東洋的思想の構造的整合性を求め

て」に改められています。「意識と本質」を収める第六巻は一九九二年十月刊行です。井筒生前です。この副題の改変は井筒自身の意思であると思われれます。今は著作の副題の問題は措いておきます。この副題が示すように「東洋哲學」が正面に押し出された最初の論文が「意識と本質」です。（ただし未だ『思想』掲載時にこの副題があったかは確かめていません。）

やっと今日の主題である「井筒俊彦の東洋哲學」に辿り着きました。

此處で問題となってくるのは井筒に於いて「東洋哲學」は如何なる者であるかと言う点になります。また『意識と本質』の副題が「東洋哲學の共時的構造化のために」であるのは何を意味しているのか、此れも問題です。此れ等の點に考察を進めていくことにします。

#### 四、井筒俊彦の東洋哲學

##### 四・一 東洋

東洋は西洋と對になる言葉です。

其處で先ず西洋の語から考察しましょう。尤もこの「西洋」、今「せいよう」と訓みましたが實は此の訓みで好いのか不確かです。即ち「さいよう」という訓みもあるのです。この訓みの問題は實は此の問題の考察に深く関わっています。然しその事は後に回して取り敢えず「せいよう」という現在普通に使われている訓みに従っておきます。

さて西洋の語、漢土では南宋時代から使われていたようです。その指す所は、南シナ海からインド洋に架けての海洋及びその沿岸地域です。但し『漢語大詞典』を見ても南宋時代の用例は載せていません。『日本國語大辭典』（以下『日國』と略稱します）には次の様な説明を載せています。

A、「(1)「東洋」「西洋」とは、中國では周邊世界の四海の一つである南海を東西に分けた名稱であった。のち、その範圍は中國と南海諸國との關係によつて變化し、「西洋」はインド洋沿岸地域全體をさしたり、さらに遠いアフリカ、ヨーロッパ、アメリカの三州をさしたりもした。

(2) 日本へは、マテオリッチらイエズス會士の著述を通じて傳わつたが、蘭學を通してヨーロッパの實證科學の優秀さを知り、日本をさす「東洋」とは異質の文化をもつてあるということ、特にヨーロッパとアメリカ合衆國をさすようになっていった。」

(本稿は原則正字體に統一した。ただし電腦文字入力能力の制約で必ずしも原則通りにはなっていない箇所もある)

此れはヤマト語「西洋」についての説明です。しかし(1)は漢土に於ける此の語の指す所をそのまま採り入れていると考えられます。(2)の意味の變化も漢土で起こっています。漢土でも西歐・合衆國を指して「西洋(xiyang)」の語は使われています。ただ此の變化はヤマト・漢土でそれぞれに起こったのか、どちらかが先行して、片方が其れに倣ったのか、此の點は分かりません。

ところで『日國』の説明は注目すべき指摘をしています。「東洋」は「西洋」と共に使われ始めたことを示唆しています。「西洋」が海とその沿岸を指したように、「東洋」も海とその沿岸を指したと豫測されます。ヤマトでは西洋が西歐・合衆國を意味する様に變化するに應じて、西歐以東の地を指すようになって



いきます。現代ではトルコ以东のアジア諸國、取り分け南アジア、東アジアを指すのが最も普通の用法です。漢土でも意味の變化が起こります。ヤマトと似た方向で使われる例もないではありませんが、東の大海中の國、特にヤマトを指す様になりました。

なお「東洋」については元末汪大淵『島夷誌略』（一三四九年成立）が初出であると言われています。

以上の考察から東洋・西洋は第一に地理的な概念であると言えます。然しヤマトにあつては單に地理的な概念に終わりません。其れは文化（技藝）の差異をも含んで使われています。

なお漢土では文化（技藝）の差異が含蓄されているかはつきりしません。然し漢土近代でも「東西文化」などの表現があります。其れは文化（技藝）上の西歐・合衆國と漢土を對比させます。ヤマトでは西洋・東洋を對にするのに對して、漢土現代では西方と東方を對としています。

以上は東洋・西洋に就いて一般的な考察をしました。

此の講義は井筒俊彦の「東洋哲學」を主題としています。そこで井筒が「東洋」をどう理解していたかを考えてみます。

井筒は東洋は何處を指すか、この形では發言していません。然し「東洋哲學」に就いて次の様な發言をしています。

B、「いま假に極東、中東、近東と普通呼び慣わされている廣大なアジア文化圏に古來展開された哲學的思惟の様々な傳統を東洋哲學の名で通觀する」（『意識と本質』七頁）

「東洋哲學」に就いては後ほど問題としますので今は略しておきます。東洋に限って言えば「假に」と限定を付けていますが、アジア文化圏を想定しています。尤も此處に既に井筒の特徴が一つ現れています。中東、近東を含めている點です。

尤も中東・近東が何處を指すか、これは注意を要します。即ち中東が指す地域が二十世紀前半と後半、更にはソ連崩壊後と變化を來しているからです。ソ連崩壊は一九九一年、『意識と本質』刊行（一九八三年）の後です。従ってソ連崩壊後の變化は影響していないと考えられます。只二十世紀後半（正確に言えば第二次世界大戦中から）始まる變化は影響している可能性があります。

『日國』の近東・中東の説解を見てみます。先ず近東

C、〔Near East の譯語〕ヨーロッパ人が、アジアの西部、ヨーロッパに近い地域をさしている呼稱。

トルコ、シリア、レバノン、ヨルダン、イスラエルからエジプトまでを含む。イギリス人はイラン、イラクを、アメリカ人はリビア、アフガニスタンなどを含めていう。〔新しき用語の泉（1921）〕

次に中東

D、〔Middle East の譯語〕ヨーロッパから見て東方の地のうち、極東と近東の中間の地域をいう。アラビア半島およびイラク・イラン・アフガニスタンなどをさすことが多いが、北アフリカから西アジアに至る中近東と同義に用いることもある。」

なお用例としては一九五二年の吉田健一の文章を挙げています。

序でに極東も見えます。

E、〔Far East の譯語〕西歐諸國から見て、アジアの最も東方の地域の稱。東アジア（日本、中國な

ど)、シベリア最東部の地域。」

用例としては『列國の共敵』(二九〇四)〈須崎黙堂〉を擧げています。

近東・中東・極東は英語の Near East, Middle East, Far East からの譯語とされています。果たして英語からの譯語と斷定して好いのか、疑問は残ります。他の西歐諸國語にも相當する言い方がありそうに思えます。その邊は國語學者に任せることにして、先へ進みます。假に英語起源としても、その指す地域が何處かはOEDにでも確認する必要があるでしょうが、此れも省きます。『日國』から分かるのは、西歐で東方の地を三つに分けて考えていたことです。そして近い東方(近東)は地中海の東の沿岸地域を中心に指しています。中ぐらいの東(中東)は近東から更に陸路を行くか、海路を行くかして比較的容易に辿り着ける地域が考えられているようです。極東は海路遙かにある地域を中心に考えられているようです。

二十世紀後半に中東は指す範圍を變えたと前に申しました。その變化とは中東が廣く把えられ様になったことです。近東と言われていた地域と境界が曖昧になります。中近東という言葉もあります。この言葉のように中東・近東の區別が消えていったと言っても好いかも知れません。

井筒は一九三七(昭和十二)年に大學を卒業しています。その教養の基礎は二十世紀前半に形成されたと考えられます。然し二十世紀後半カナダに渡り、盛んに西歐の學者と交流しています。また外國語による發表は英語が基本です。この事を考えると井筒が置かれた知的環境では既に中東が指す地域を廣げていたと考えられます。此處に井筒が言う「近東」「中東」が何處を指していたのか少しの疑念が生じます。

尤も井筒は近東・中東・極東と言った區別を超え、アジア諸國を一纏めにして把えようとしています。従って井筒が「近東」「中東」で何處を指したか、此れは問題ではないのかも知れません。

尤もまた別の問題が此處に見出されます。近東或いは中近東と言う言葉はアジアだけを指しません。『日國』の説解の中に示されるように、北阿弗利加も這入ってきます。井筒はアジア文化圏と言います。この時北阿弗利加は切り捨てられているのでしょうか？其れとも含めて考えられているのでしょうか？此の點を嚴密に追求することは餘り生産的ではないでしょう。今は斯うしたざっくりした把え方の中に「東洋」或いは「東洋哲學」が單純に割り切れない問題を孕んでいることを確認しておくことに止めます。

考えてみれば、抑も引用Bの東洋の限定は「假」なのでした。尤もこの「假」もどれだけ深みのある言葉か問題になります。

#### 四・二、東洋哲學

前に引いたBで東洋哲學は「廣大なアジア文化圏に古來展開された哲學的思惟の様々な傳統」を指していました。アジア文化圏には「哲學的思惟」を見出すことは出来る。然しはつきりとした「哲學」があったとは言っていません。

西歐（合衆國を含む）の人からは東洋（アジア）に哲學がないと見られてきました。これは二十一世紀に這入ろうという時期でもそうです。ジャック・デリダが漢土を訪れ、その地の學生を前にして此の地には哲學がないと發言し、大混亂を起こしたことがあります。

井筒俊彦にとつても「東洋哲學」はまだ形を爲していない者でした。

F、「ヘレニズムとヘブライズム」という二本の柱を立てれば、大ざっぱながら、一應は、一つの有機的統一體の自己展開として見通すことができる西洋哲學とは違って、與えられたままの東洋哲學には全體

的統一もなければ、有機的構造性もない。部分的、断片的ならいざしらず、全體的に西洋哲學と並置できるような纏まりは、そこにはない。」(『意識と本質』四一〇頁)

つまり井筒の目から見ても「東洋」には哲學的思惟はあっても、哲學という「學」としての形はなかったのです。従って西洋哲學と並べられる東洋哲學はこれから形成していかなければならない者です。その事を井筒はこう言っています。

G、「このような状態にある多くの思想潮流を、「東洋哲學」の名に價する有機的統一體にまで纏め上げ、(中略)そこに何らかの、西洋哲學の場合には必要のない、人爲的、理論的操作を加えることが必要になってくる。」(同前四一〇～四一一頁)

東洋にあるのはばらばらな哲學的思惟に止まります。哲學と稱するに價するためには、先ずそれらの哲學的思惟を有機的統一體に纏め上げる必要があります。更に人爲的、理論的操作を加える必要もあります。そして初めて西洋哲學と並置できる「東洋哲學」になるのです。哲學的思惟を脱して「哲學」という理論になるということでしょう。

然し此處には一つの疑問を挟むことができます。

東洋に「哲學」という學問範疇はありませんでした。少なくとも漢文化圏においてはそうです。抑も學問範疇の立て方が西洋と東洋では異なっているのです。東洋、とりわけ私たちにとって親しい漢文化圏における學問範疇に従って考える、こういう選択肢もあるのでは無いでしょうか？そして學問の形も漢文化圏に傳統的な形で表現できるのでは無いでしょうか？

勿論漢文文化圏の學問を範型とする必要はありません。インド文化圏の學問、あるいはイスラーム文化圏の學問を範型にしても好いのではないのでしょうか。

しかし井筒の「東洋哲學」は「西洋哲學」に竝べられる形に「哲學」という理論として作り上げようとしています。そしてこの意味で「東洋哲學」はこれから築き上げていかなければならない者なのです。

この點に關して井筒はこう語っています。

G、「東洋思想の諸傳統を我々自身の意識に内面化し、そこにおのずから成立する東洋哲學の磁場のなから、新しい哲學を世界的コンテクストにおいて生み出していく努力をし始めなければならない時期に、今、我々は來ているのではないか、と私は思う。」（同前四一二頁）

「東洋思想の諸傳統を我々自身の意識に内面化し、そこにおのずから成立する東洋哲學の磁場」、この表現はなかなか難物です。「意識に内面化する」「東洋哲學の磁場」こういう表現は慎重に扱う必要があるでしょう。今はこれらの言葉には立ち入れません。ここでは後半の「世界的コンテクストにおいて生み出していく」という表現に注目しておきます。この言葉は先に出した私の疑問に答えを與えているでしょう。すなわち漢文文化圏を例にとるとこう言えるでしょう。漢文文化圏の學問の範疇、學問形式に従う、それは漢文文化圏には通用するかもしれませんが、世界には通用しません。井筒の眼は漢文文化圏に止まりません。あくまで世界に通用する「哲學」を志向しているのです。

ではどうすれば世界に通用するのでしょうか？

『意識と本質』という書物は抑もそうした世界に通用する哲學の試みです。そこでこの書で井筒がどのように問題を立て、検討し、どのように哲學を立てようとしているか、それを詳しく見ていくならば、井筒が世界に通用する要件をどう考えていたか明らかになるでしょう。しかし私の研究はまだその全體像を明らかにするまでには至っていません。私が元々進めていた研究、程朱學の井筒の把え方には言及できませんが。しかしこの言及は後に回して、次の井筒の言葉に注意したいと思います。

H、「それにしても、この試作、東洋哲學と銘打っておきながら、西洋哲學特有の概念をふんだんに使  
い、かつ西洋哲學的問題意識が至るところに混入していることに、不審の念を抱かれる向きもあろうか  
と思う。

しかし、ひるがえって考えてみれば、それこそ逆に、現時点において構想される東洋哲學なるもの  
の、あるべき姿なのではないだろうか。」(同前四一三頁)

東洋哲學、正確に言えば東洋における哲學的思惟をそのまま示してもそれは世界に通用しない、そう井筒  
は考えているのです。勿論東洋における哲學的思惟を示す資料を基礎に置きます。しかしそれを扱うに當  
たって、西洋哲學的問題意識、西洋哲學特有の概念を自在に使う、そう言っているのです。そしてそれが世  
界に通用する哲學への手段であると考えられているのです。

ここには當然西洋哲學を利用して東洋哲學を描き出すことは東洋哲學の西洋哲學化ではないかという疑問  
が生じます。

井筒は西洋哲學を利用して東洋哲學を描き出すとする意圖をこう説明しています。引用Hの續きです。

I、「科學技術に基く西洋的文化パラダイムが、事實上、人類文化の共通パラダイムになり、好むと好まざるにかかわらず、その基礎の上に、人類が地球社會化への方向を目指して滔滔と流れつつある現在、徒らに西洋を無視して東洋だけを孤立させて論じることは無意味だし、また實際上そんなことは不可能に近い。世界に向って開けた視野において、ものを考えようとするかぎり、人類の現在の状況では、東洋哲學といつても、どうしても西洋哲學が深く関わってくる。」(同前四一三頁、東洋哲學の東洋に傍點) 我々が置かれた世界は西洋文化パラダイムの上に成り立っています。従つて世界に開かれた議論をするためにはそのパラダイムに關わつて居る必要があるということです。徒に西洋に背をそむけるならば、其れは自らを東洋に閉じ籠めるに過ぎないでしょう。

井筒は日本について更にこう言っています。

J、「そればかりではない。特に、明治以來、一途に歐化の道を驀進してきた我々日本人の場合、その意識——少なくとも意識表層——は、もはや後にひけないほど西洋化しているのだ。ほとんどそれと自覺することなしに、我々は西洋的思考で物事を考える習慣を身につけてしまっている。」(同前四一三—四一四頁)

日本人は西洋的思考にすっかり泥んでしまっているのです。

然しこの言葉(J)は井筒の中に矛盾をも感じさせます。何故なら井筒が東洋哲學を志向する理由を斯う語っているからです。

K、「齡ようやく七十に間近い今頃になって、自分の「實存」の根は、やっぱり東洋にあったのだと、しみじみ感じるようになった。」(同前四〇九頁)



Jで言う「日本人」の中に井筒自身は這入らないのでしょうか。這入るとすればその意識は「後にひけなほど西洋化している」のではないのでしょうか。そこに「東洋」意識はどう生まれるのでしょうか？

Jは「少なくとも表層意識」と豫防線を張っています。深層意識はそう簡単に西洋化しない、と考えているのでしょうか。私はこの豫測を支持して好いと思います。その理由は井筒の次の言葉です。

L、「だが、他方、日本語によって存在を秩序付け、日本語特有の意味分節の網目を通して物事を考え、物事を感じ、日本語的意味形象の構成する世界を「現実」としてそこに生きる我々が、心の底まで完全に歐化してしまうことはあり得ない。ということとは、要するに、我々現代の日本人の實存そのもののなかに、意識の表層と深層とを二つの軸として、西洋と東洋とが微妙な形で混交し融合しているということだ。」（同前四一四頁）

井筒は日本語を母語としています。それは日本語特有の世界把握を離れることができないと言うことです。井筒は「日本語によって存在を秩序付け」と言っています。井筒の意識論・存在論は言語に大きく依存しています。此れは『意識と本質』の主題に関わってきます。此の點後で少し詳しく検討を加えることにしましょう。今は論據にまで言及せず、簡単に説明しておきます。言語によって同じ事態を異なる把握をします。例えばヤマトでは「白」だけで或る色を表します。然しイヌイットはヤマトが「白」という所を何種類にも分けていると言います。同じ事態を母語を異にする人は異なる分け方をしているのです。そしてその分け方はコトバに紐付けられて固定されます。この様にヤマト語を母語とする人はそのヤマト語の根柢にある事態の分節を離れられないのです。少なくとも井筒の理論に従うとこうなるのです。コトバの世界を把握する働きは意識の深層に働いているのです。それ故に表面的に歐化していても、意識の深層に於いてはヤマ

トが根強く生き残っているということになるのです。

(ここで片假名書きのコトバという表現をしています。これは井筒が意識的に片假名書きで表現しているからです。まだ井筒が片假名書きをするか私は納得できていません。然し井筒の意圖があることは理解しています。この場面では井筒に寄り添って説明をしています。そこで井筒の表記に従いました。)

尤も今までの考察ではまだ幾つか疑問が残ります。

例えば、今まで見てきた所ではヤマトと西歐を對比しヤマトの「哲學」を追及する理由にはなりません。然し東洋という広い地域を指します。其處には異なる幾つもの言語が使われています。私は漢文文化圏として纏めて扱えています。然し漢土の言葉(漢語、所謂る中國語)とヤマト語・琉球語・韓國朝鮮語は言語構造的に全く異なります。南アジアは古典語としてサンスクリット語を持ちます。この言葉はヨーロッパ諸言語に近いのです。西アジアはアラビア語が有力です。アラビア語はイスラームと結び附いて漢土にまで影響を及ぼしています。イスラームはアラビア語で統一されているかという点、ペルシア語が独自の輝きを示しています。ペルシア語は古くはサンスクリット語と強い關聯があるといわれています。それを一つに東洋と纏められるのでしょうか。

同じ事は西洋に就いても言えます。フランス・イタリア・スペインはラテン語との關聯が強い言葉を使っています。此れに對してドイツ・イングランドはゲルマン語から生まれてきました。アイルランドなどは古く西歐の地に土着していたケルト系の言葉です。實際大陸と英米系では少し異なる哲學傳統があるようです。(此の點は河谷さんや滝沢さんに詳しく教えて戴きたいところです。)

果たして東洋・西洋という大きな分け方で好いのでしょうか？

但し井筒は東洋・西洋と対立させています。尤も東洋・西洋という對比は井筒に始まる訣ではありません。古くは明治時代から行われてきました。岡倉天心が『茶の本』『東洋の理想』などの書を著しています。話を哲學に限定しましょう。明治の早い段階で哲學は大學で教えられています。始めは西歐から學者を招いて哲學を講じて貰います。此れは當然西洋哲學です。然し東洋哲學の開講を求める聲も大きかったようです。當時唯一の大學であった東京大學（後に帝國大學に名を改めています）に明治十二年に「佛書講義」という科目が置かれています。此處で注目したいのはこの「佛書講義」が哲學として開かれていることです。西洋でない哲學がこの時期から意識されていたことです。佛書という名が示すように東洋に屬する哲學です。即ち西洋哲學に對する東洋哲學は古く明治からある問題の建て方であるとも言えるのです。その意味では井筒の「東洋哲學」は新しい試みではなく、少なくともヤマトに底流していた一つの流れを復活させた者と言えるでしょう。

そう見ると、問題は井筒の「東洋哲學」が少なくとも明治から受け継がれてきた「東洋哲學」の復活なのか、それとも其の傳統とは無縁な新たな提起なのか氣になります。

然しこの問題に就いては現在の私に論ずる準備がありません。此處は問題の提起に止めておきます。そして井筒が「東洋哲學」と言っていることを受けて、「東洋哲學」として論じていきます。

\*後篇を次号（第四十三号）に掲載します